

# 鳥山石燕『画図百鬼夜行』風の巻を読む

倉 本 昭

## はじめに

これまで、三本の論考を通じ、鳥山石燕による『画図百鬼夜行』（以下単に『画図百鬼』）の妖怪図を一体一体検討してきた。このたび、最終巻の風の巻に見られる妖怪図一つ一つについて、含まれた寓意や、設けられた趣向、それらから浮かび上がるユーモアについて検討していくことにする。その過程で、各図の前にある妖怪図とどうつながるかも明らかにしていく。

さて、まずは陰・陽に続く巻に「風」の名が付けられたわけを考えたい。

参考になるのは、『春秋元命包』に「陰陽怒為風」と見え、『春秋考異郵』に「風之為言萌也、其立字虫動於几中者為風。虫動於几中、言陽氣無不周也、明虫之属得陽乃生、遇陰則死、故風為陰中之陽者也」とある、二つの記事である。記事を収める二書は併書ながら、いずれの記事も『太平御覧』巻九の風の項に引かれて

いる。また『淵鑑類函』巻六・天部六の風一にも両方が引かれる。（引用傍線筆者）

石燕は、先の引用の傍線部から、巻名に陰↓陽とつけた後に、風の巻とつける発想を得たのであろう。

風の巻冒頭には「見越」図が載っている。風に先立つ陽の巻は、生霊、死霊ときて、幽霊で終わったから、人間型の化け物つながりで、風の巻冒頭に「見越」がおかれたと考える。幽霊の図に梅若柳が描かれていたのに対し、「見越」図にも後述する通り印象的な木が描き込まれている。また、梅若ゆかりの柳で陽の巻をしめくくり、次が風の巻となるのも、「柳に風」の語を想起したら、ちよっとした洒落になっていることがわかる。画面左方向かって母を呼びかける梅若幽霊に対し、応えるかのように、見越入道は画面右方向かって、大木の影から半身を現わす形で描かれることも見逃してはなるまい。「幽霊」図と「見越」図とが、巻を異にしても断絶なくつながることを確認した上で、「見越」

図の趣向を検討していこう。

なお『画図百鬼夜行』は角川ソフィア文庫『鳥山石燕画図百鬼夜行全画集』五一〜五四頁、国書刊行会『鳥山石燕画図百鬼夜行』七七〜八〇頁に拠った。「百怪図巻」「妖怪づくし」は国書刊行会『妖怪図巻』（京極夏彦序、多田克己編・解説二〇〇〇年）に拠る。

## 一 「見越」図のエロティシズム

「見越」図の背景に描かれたもので、おのずから注意をひくのは、木の枝に吊るされた「わらじ」である。これは厄神よけのまじないの草履で、「フセギの大わらじ」と呼ばれるものである。現在でも、この習俗が残る場所として、長野県下伊那郡松川町上片桐の諏訪形集落、青梅市小曾木五丁目岩蔵集落、但馬日高町田の口などがある。

わらじを吊るす木は竹であったり、杉であったり、桜であったりと、一種に固定されるわけではないが、後述する説とも関わって注目したいのは、榎に吊るす青梅市今寺二丁目、埼玉県比企郡滑川町伊古の例である。今寺では一里塚として利用されたと伝わる榎の枝にフセギの大わらじが掛けられる。伊古のフセギの場合、「広報なめがわ」二〇一七年五月 No.55 に特集記事が掲載され、計一〇ヶ所のフセギの大わらじ設置個所が地図と現場写真で紹介されている。その中に、庚申塚の脇に立つ榎に大わらじが

吊るされている写真がある。

フセギの大わらじは、いずれも村落の境界に設置される。村落に侵入しようとする厄神に対し、巨人が存在することをアピールして追い破う意味があるという。

それをふまえて石燕の「見越」図を見れば、フセギの大わらじを履くに足る大入道が本当にいたとは、厄神ばかりか村人までもびっくりだろう、という感想がもれてくること必定である。石燕のユーモア感覚を、まずはかようなところに見出したい。

しかし、滑稽味を醸し出す要素はそれだけではない。「見越」図に見える木は、いわゆる女陰木として描かれている。同時に「わらじ」が女陰の隠語であることも想起したい。つまり、本図は性的な象徴物を描きこみ、読者を艶笑の世界に誘うものといえる。

江戸の有名な女陰木としては、渋谷区千駄ヶ谷の「おまん榎」が挙げられる。瑞円寺に上る榎坂の名の由来になったともいわれる、榎の巨木であった。名にある「おまん」は徳川頼宣の生母の名で、彼女は瑞円寺住職の叔母であったという。榎の霊木が、この人と具体的にどういうゆかりでつながっているのか、言い伝えだけでは判然としない点もある。それはさておき、石燕が活躍した頃には、おまん榎が好奇と信仰の対象になっていたはずである。

フセギの草鞋が榎に吊るされる例があることを先に確認したけ

れども、おまん榎に草鞋を吊るした事実はない。そもそも、石燕が描きこんだ木が榎かどうか判別はつかない。しかし江戸の庶民が「見越」図の女陰木を見て、おまん榎に思いを致した可能性は否定できない。陽の巻「幽霊」図に梅若柳が描かれているから、そこからの連想で石燕は、同じ江戸の伝説的名木・おまん榎を彷彿とさせる木を描きこんだと考えられる。

女陰木、わらじが示唆するものに気付けば、見越入道自体が何に見立てられているかも知ずからわかる。その淫靡な趣向に読者は微笑を禁じえない。

## 二 「せうけら」図と庚申信仰

「せうけら」の図柄が庚申信仰で説かれる三戸虫をヒントにしているという通説には従うべきである。<sup>(注5)</sup>

石燕の図は、しゅうけらが屋敷の屋根の天窓をうかがって、この家の人間にとりつこうと侵入するところを描く。しゅうけらの正体(？)・三戸虫は庚申の夜に人間の体を抜け出し、天帝に悪事を告げ口するというのだから、注進した後再び人間の身体に戻るわけである。石燕描く「せうけら」の仕草は屋根を切破る、いわゆる天切(あまきり)の方法で家宅侵入する泥棒を彷彿させる。庚申の夜に受胎した子は泥坊になるという俗信を踏まえ、しゅうけら自体を泥棒のように描いたのである。まったく多田克己が指摘する通りである。<sup>(注6)</sup>

鳥山石燕『画図百鬼夜行』風の巻を読む

では、「せうけら」図と、その前に来る「見越」図とのつながりはいかがなものか。石燕『画図百鬼夜行』との関連性が説かれる佐脇嵩之画「百怪図巻」(その系統の「化物づくし」絵巻も含め)では、巻頭から見越入道↓しゅうけら↓へうすべと並ぶから、『画図百鬼夜行』風の巻冒頭からの三体は、その順番にならって並んでいるにすぎない。よって、「見越」図と「せうけら」図とのつながりに余り深い意味は見出しがたい。

ところが登場順はならっていない。「百怪図巻」「化物づくし」に描かれる「しゅうけら」は、石燕が描くものとは似ても似つかない形姿なのである。みずばらしい獅子のような顔で、身体は骨と皮だけのような瘦軀に描かれている。背中がひどく曲がっているのも印象的である。

これが三戸のうちの「彭質」なるものに「似ていなくもない」と多田克己が書いている。<sup>(注8)</sup>多田が彭質の情報を得る文献は、宋の曾慥が編んだ、四二巻、一〇八篇から成る『道枢』である。その巻二七・太白還丹篇に「彭質如獸」の文が確かにある。しかし『道枢』にはそれ以上彭質の形状について説明はないし、図像も載らない。彭質の図像としては『玉函秘典』『太上除三戸九虫保生經』に載る、ほぼ同図柄の絵が知られている。二書のうち前者は明の周履靖の手になるもので『浙江通志』『夷門広牘』『正統道蔵』に入る。後者は撰人不明で唐末の書であり、『正統道蔵』に入る。

これらによって彭質（ただし原典では五偏に質の字）の図を見るに、筆者は絵巻の「しやうけら」に似るとは思わない。彭質は獅子を彷彿とさせる形状で、体軀はどっしりとして、ふさふさした尾を持ち、口には巻物をくわえる。一方、「百怪図巻」の「しやうけら」は顔こそ獅子に見えなくもないが、たがみがなく、体軀は瘦せぎす、尾もなく、何もくわえない。彭質とは全く異なる姿である。

加えて、三戸図の載る道書類を絵師が披閲したかについても疑わしい。

そこで筆者は以下の如く考える。しやうけらが庚申信仰にまつわる化物であることは、庚申の夜に唱えるまじない歌に「シャウキヤ」「シャウキヤラ」の語があることから疑いない。よって、絵巻に見えるしやうけらの姿態は、庚申信仰の産物に原型を求めるのが自然なのではないか。その産物のうち、江戸時代の人々にとって身近なところにあったものとして庚申塔があり、そこには多く猿が彫刻された。

参考までに、江戸時代前期に造立された関東の庚申塔にしぼり、そこに刻まれた猿の彫像から、絵巻に見えるしやうけら像について考えるヒントになりそうなものを、三例挙げる。

①東京都北区にある大久寺に、慶安三年に造立された庚申塔の台石が残る。その前面を見ると、向かって右に、こちら（正面）を向いて立ち、合掌する猿が浮彫りされている。向かって左に

は、合掌猿の方を向いて（つまり側面をこちらに向けて）両膝を立てて座し、合掌した手を前に差し伸べている有帽の猿が彫られている。

②板橋区観明寺にある寛文元年造立の庚申塔には、主尊青面金剛の足下に一匹の猿と一羽の鶏が向かい合って刻まれる。左側の猿は鶏に向かっていて、こちらに側面を見せ、座位（①ほど膝は立てていない）で合掌した手を前に伸ばす格好である。

③取手市小堀の水神社にある寛文九年造立庚申塔には、青面金剛の脇侍として、二猿が立位で手を前に差し伸べ、主尊を仰ぐ姿が彫られている。青面金剛を描いた大津絵で、このポーズの猿が描かれたものも残る。

以上のうち、絵巻のしやうけらのポーズに一番似通うのは③である。

これらはいくまで参考例であり、江戸時代前期にしぼっても関東各地に多くの作例がある庚申塔の猿の中で、絵師の目にとまり、しやうけら造形のヒントになった猿像はこれだと、具体的に指摘することは無論できない。しかしながら、道書に見える彭質図像よりも、庚申塔の猿の方が余程絵巻のしやうけらに近いことは確認できる。

では、石燕の「せうけら」に戻って、絵巻に描かれたものとは異なるその姿形は、何がモデルであったと考えるべきか。

しやうけらが屋根を這うような恰好に描かれるのは、昆虫のケ

ラを意識したともいえるし、しょうけらの顔は納骨利面をモデルにしたのかもしれない。

また、庚申塔の諸作例を見れば、青面金剛に踏まれる鬼の彫られているものが散見する。鬼は頭を左方向に体の側面を見せて、肘・膝を曲げながら前腕・下腿を地につけ、頭と背中にかかる重みを支え、耐えている格好で表されるものが多い。石燕が江戸の諸寺院で、それら鬼の作例を見、触発された可能性もある。<sup>(注13)</sup>

最後に指摘しておきたいのは、先人が描いた鬼の画像の影響である。筆頭に挙げるべきは、真珠庵本系統の百鬼夜行絵巻に登場する、唐櫃を開けて器物の化物どもを呼び出す赤鬼である。石燕が、この赤鬼をふまえて、しょうけらを造形したとしたら、鬼がとりつく唐櫃のふたのおもかげは、天窓に残ったこととなる。他に御伽草子『酒吞童子』に見える、斬首され、背中を見せて屈した格好の酒吞童子の挿絵も、石燕の参考になったかもしれない。<sup>(注14)</sup>

以上のようなものを参考に、石燕が「百怪図巻」「妖怪づくし」にあるしょうけらの風姿を独自の工夫で変更したのは、先に触れたように、庚申夜に受胎して生まれた子は泥棒になるという俗信をふまえて、しょうけら自体を泥棒に見立てる趣向に関わっていることであつたのだらう。絵巻に描かれた「しょうけら」の姿では泥棒風に仕立てられないのである。

### 三 「ひやうすべ」図の風刺性

「百怪図巻」「化物づくし」の配列順に従い、『画図百鬼』では「せうけら」図の次に「ひやうすべ」図がきて、両図が見開きで並ぶ。

ひやうすべが河童であることは、つとに知られている。<sup>(注15)</sup> 石燕は『諸国里人談』巻四妖異部「河童歌（かはらうのうた）」に河童よけのまじないとして、「ひやうすべに川だちせしを忘れなよ川だち男我も菅原」の歌が紹介され、「ひやうすべは兵揃にて所の名なり。此村に天満宮のやしろあり。よつてすがはらといふなるべし」という記事によって、「ひやうすべ」が河童に縁あることば『里人談』では河童ゆかりの地名）であることを知りえた。<sup>(注16)</sup> 彼が参考にした「百怪図巻」や同系統絵巻に載るひやうすべが、河童の一種であろうことは、そこから推測できたはずである。

さて、この河童の一種としてのひやうすべが、石燕図では竹製の縁に立ち、座敷に侵入しようとしている。画面右手に南天の木、その手前に手水用の水さしと盆。ひやうすべを中央に置いて画面左側には廁が描かれる。廁の手前には自然木を柱に用いた袖垣がある。一見して数寄を凝らした屋敷であることが瞭然としている。屋敷の主は数寄者であらう。

ひやうすべの背景に廁を描いたのは、廁に潜む河童の言い伝えが各地に残ることと関係があると思われる。ただ問題は、なぜ数

寄者の屋敷の廁を描く必要があったのかという点である。(注18)

この問題について考えるために、「ひやうすべ」という名称の構成要素「ひやうす」は、あなどる・ばかにするという意味の動詞「へうす」と音韻が重なることに注意したい。そこから推すに、化け物は屋敷の主人をからかう趣向を担って描かれていると思われる。酒を過ごし、廁から千鳥足で戻る数寄者が、ひやうすべに仮託されているのか。ひやうすべが、その御仁をからかう仕草で、(河童の眷属だけに)廁から座敷に上がりこんできたか。いずれにもとれる。また、「へうす」は「茶にする」ことである。茶事にいそむ数寄者が茶にされるということになる。(注19)

このように考えると、先の問題のみならず、ほかならぬ「ひやうすべ」が、廁から座敷に上がりこむのはなぜかも説明がつく。中酒なら茶の湯の懐石につきものであるとはいえ、数寄者が酒を過ごすのは、廁行きも近くなり、無風流である。足元が乱れるとなれば、下品この上ない。

安永二年刊『浪華今八卦』「羈菱卦」に「客がひどう酒に酔ふと、女郎いたわり、このやうにゑいなさつたにはうす茶がよい、といふ。あるじのかゝが、しげさん、こい茶といふのもあるそふなナア。ハイそりやあるけれどな、こい茶といふのはつねはのまぬのじやわいな。元日に紅絹のきれにぬいこんでふり出して酒でのむのが、こい茶じやわいな、ととそと取り違へていると見へる」とあるのは、酒と茶事を絡めた笑い(さしずめ現代の漫才に

いうボケ)の趣向であるけれど、實際酔い覚ましに薄茶を飲む無風流者もいたのである。(注20) 酒を過ごす数寄者も、それとさして怪誕がない。

石燕がからかうのは、かような俗臭ふんぶんたる数寄者だと思われる。『画図百鬼』刊行当時、諸書に茶人批判は散見する。

『画図百鬼』が出る前年の安永三年に、江戸ではやった見世物芸をネタにした、平賀源内『放屁論』には、諸芸批判の言辞が並ぶ中、「茶人の人柄風流めくも、利休・宗旦が糞を嘗る。其余諸芸皆衰へ、己が工夫才覚なければ、古人のしふるしたる事さへも、古人の足本へもとゞかざるは、心を用ざるが故なり」とある。(注21)

同じく安永三年刊『風流醉談義』には、更にうがった当世茶道批判が見られる。

今時のくせとして茶人はしさいらしく、また茶をせぬ人の茶を恐るゝ事はへびまむしのごとく、またすこしものしりし人の茶をそしる事は、いつそ茶人はすじ目のわるき物のやうに心得る。みなは無酔のなすところ。また茶をしらぬものを茶人よりは別世界の人の様に見なす。いづれも茶の本意をしらぬ故なり。(中略)また茶をするならば、それ／＼の宗匠にしたがふて、我意をいださず楽むべきに、わしがおもひ付じやとて、いろ／＼のえもしれぬものを茶具にもちひ、これはわしが流儀じやなどいふて、道しりがほにもてはやすは大

に見にくし。不酔なり。夫程にむちやにする気なら茶をするといふ心持がまたよつぽどあほらしい。みなは一己の見識を立て、いかさままたあの人はと評判せられたき心ゆきで、其人実にそれほど薄茶がすきでもないもの。<sup>(注22)</sup>

明和七年(『画図百鬼』刊行の五年前)刊、永井堂亀友作『風流茶人氣質』では、一癖二癖ある数寄者が笑いのめされている。その中に素人茶人を扱う話もあるので紹介しておこう。巻一の「智人から段々に肩の能俄分限者」では、有徳な主人公が、表具屋の息子から毎夕インチキな手前の手ほどきを受け、「茶の跡で酒のんで」は、息子の術策にはまり、家賃支払いの繰り延べを許したりしていた。主人公は養子の嫁に心を動かし、好きな酒の勢いで、たわけを仕掛けたのをとがめられ、隠居を余儀なくされる。その後は、この俄分限者のインチキ茶道を滑稽に描く話が展開する。本話には「浮世茶人」という蔑称も見えている。

宝暦七年刊『遊客年々考』(○五十にして遊びを知)に「揚屋の亭主に数寄者あり。茶屋の女房に茶人あり。是等を便に茶湯はなし」とあるのも、やはり低俗な素人茶人の部類に入る。<sup>(注23)</sup> 墮落した茶人だけではなく、茶人ぶる俗流も目に立ったのである。

『画図百鬼』より時代を下ると、上田秋成が『膽大小心録』で、墮落した茶道界の実態を暴いている。秋成は「市中に礼服つけて茶席をよるこぶは、客主ともに小児の業なり」と言い切った。<sup>(注24)</sup> そんな彼が茶道界の墮落ぶりを指弾したエピソードを二つ掲げている。

鳥山石燕『画図百鬼夜行』風の巻を読む

る。一つは俳人・松木淡々が弟子・秀鏡を茶会に招き、床の間に飾られた芭蕉句の掛物を収めて、「俳道の衣鉢を、こよひ秀鏡子へゆづるぞ」と言い、我が弟子におしつけ、まんまと十両をせしめた話。会席で点前を務めた古道具屋がグルで、茶会が掛物売りさばく方便に利用されている様を記している。もう一つは、千宗左が鴻池善五郎らと祇園一力に会し、『ひらがな盛衰記』の役に扮する座敷にわかを愉しんだ話である。<sup>(注25)</sup>

石燕が特定の数寄者を念頭においたかは不明であるが、ひょうすが墮落した数寄者を茶化す趣向で描かれている可能性は、如上の数々の例をふまえると、十分に考えられる。そうすると、石燕ひょうすべ図は風刺画であったのではなかったか。

なお諸書に見えるひょうすべの解説には兵主神との関連性が指摘される。ひょうすべそのものの民俗学的考証には有効であるが、江戸にいた石燕が、関西以西に集中する兵主神社群を知っていたかは疑問である。<sup>(注26)</sup>

#### 四 わいらの謎

ひょうすべが載る丁の裏には「わいら」図が載る。わいらは從來、謎の化け物で、詳しいことはわからないとされている。それにまつわる伝承もないからである。<sup>(注27)</sup> しかし、「わいら」という名称については検討の余地がある。

執金剛神を「和夷羅洎閼叉」と書く仏典があるのである。ここ

に見える「和夷羅」は金剛の謂である。

たとえば『一切経音義』巻九の「放光般若経第十九巻」に「和夷羅洄闍叉、即執金剛神也。謂手執金剛杵、因以為名焉言也」。『翻訳名義集』巻一の「八部第十四」に「和夷羅洄闍叉、即執金剛神」。『悉曇要訣』第二「社也相通証」に「放光般若云和夷羅大般若云金剛、文 variā 也。」「波和相通証」に「又大般若云執金剛、放光経云和夷羅洄、文 vajrapani 也」とある通りである。

以上のことから、わいらの名称は、金剛杵の意味の梵語に由来するものと考えられる。恐らく、わいらの前足が一本のかぎ爪であるのを、金剛杵のうち独鈷杵に見立て、その特徴を以て「和夷羅＝わいら」と名付けたのではないか。

絵巻「百怪図巻」の「わゐら」や「化物づくし」の「わいら」を見ると、顔は納曽利面に似ている。納曽利は手にはちを持って舞う。ばちを独鈷に替えて、化け物わいらを創り上げた点に遊びがあるのだろう。わいらの独鈷杵の如きかぎ爪に注目すると、セミの幼虫をヒントに創り出した化け物のように見える。しかし、あくまで正体は不明といわざるをえない。

さて、絵巻物に見える「わゐら・わいら」と石燕が描く「わいら」とでは頭部のデザインがいちじるしく異なる。石燕画わいらの頭部は、納曽利面ではなく、獅子頭に似せてあるのである。これにはわけがあって、見開きで「わいら」と向かい合う化け物「おとろし」が神社の狛犬に見立てられており、それと対の関係

で、わいらの頭部が獅子頭に似せられたのである。わいらの右に杉木立が描かれているのも、神社に関連づけているからだと考えられる。杉は神社の杜でよく見かける樹木で、神木として祀る神社も少なくない。

ひょうすべからのつながりはどう解するか。ひょうすべ除けのまじない歌に、菅原という氏の名が詠まれている。そこから、ひょうすべー菅原道真ー天満宮ー獅子（わいら）と狛犬（おとろし）という風に連想がつながっているのである。安永元年に創建されたという佐賀・松原神社の神門（現在は佐嘉神社境内の松原河童（かわそう）社）に、創建当初からひょうすべが祀られていたとしても、石燕が知っていたかについては確証がない。よって、ひょうすべー松原神社ー獅子・狛犬の連想がはたらいた可能性は低いと考えておく。ひょうすべは猿型の化け物だから、動物タイプの化け物わいらにつながるのに大きな違和感もない。

また、わいらとおとろしが対峙するのは、石燕が影響を受けた絵巻に両者が並んで登場するのにならったのだった。

最後に、わいら図の構図が後出する牛鬼図の構図と似る問題をとりあげておこう。石燕描く牛鬼は、本稿で再三触れる妖怪絵巻に描かれる姿とは似ても似つかぬ様で描かれる。そのポーズが、わいらと似通うことにも注意がいく。しかし、筆者は石燕版牛鬼が、鬼門「丑寅」の語を意識して、牛と虎を掛け合わせて描かれたものだと考えている。わいらには、それにまつわる伝承がな

以上、わいらと牛鬼とは全く関係がない化け物同士といわざるをえない。石燕が何か深い意味をこめて牛鬼図とわいら図の構図を似せたとは考えない。

(続稿)

\*なお本稿における引用には、テキストの表記を適宜改めた点があることをお断りしておく。

また民俗学関連資料の収集において、亀谷和輝君、篠崎芳朗君の多大な協力を得たことに感謝する。

#### 注

(注1) 北城伸子は『国語』「周語下」から「於是乎氣無滯陰、亦無散陽。陰陽序次、風雨時至、嘉生繁祉、人民蘇利、物備而業成、上下不能」の文を引き、「音楽の中庸によってすべての物が正常な道を得、陰陽の順序が整うと風は時に随い吹き、雨もまた正しく降る、という。このように風雨が時機にかなうというのは天下泰平のあかしであり……「陰」・「陽」に続き「風」・「雨」という巻の名が付けられるのは、陰陽が和合した結果、時に応じた風雨が起る、という連想に基づくと考えられるだろう」とする。北城説は、『画図百鬼』風の巻から、『今昔画図続百鬼』の雨の巻へのつながりを考慮したもので、注目に値する。しかし、『画図百鬼』は陰・陽・風の三巻からなり、『続百鬼』に先んじて出版されたのだから、あくまで陰→陽→風までのつながりを、一つのまとま

りとして考えた上で、最終巻が風と名づけられた意味を考える必要もあろう。筆者の説は、その立場からの発想に基づく。

筆者は更に、石燕が『書言字考節用集』(第一三冊・数量姓氏十「六氣」の項に「六氣曰、陰陽風雨晦明也」とあるのを意識して、『続百鬼』が雨の巻から始まり、晦・明の巻に続くのだと考える。

「六氣曰」以下の文は、もともと「春秋左氏伝」昭公元年の記事に見える。『左伝』の記事は、『東萊左氏博議』のほか、『初学記』巻一・天部「六氣」の項、『太平御覧』巻七二一・方術部二・医一に引く。北城説に引用される『国語』「周語下」においても「天六地五、数之常也」の章昭注に「天有六氣、謂陰陽風雨晦明也」と見える。

なお北城説は「明けなき夜の百鬼夜行―鳥山石燕『画図百鬼夜行』の構成方法」(『國文學解釈と教材の研究』二〇〇七年九月八九〜九〇頁)を参照。

(注2) [blog.goo.ne.jp/trx\\_45/e/0b188af28547ceab1f31b51833ce143](http://blog.goo.ne.jp/trx_45/e/0b188af28547ceab1f31b51833ce143)「CosmosFactory」の二〇〇六年二月一六日の記事「ムラ境の厄神除け」

[osokinogakkou.blog29.fc.com/blog-entry-162.html](http://osokinogakkou.blog29.fc.com/blog-entry-162.html)「青梅市小曾木地区紹介ブログ」の「H26.7.27小曾木五丁目(岩蔵)大わらじ作り」

田の口では塞の神祭りにおいて大わらじを杉の木に吊るす。ブログ「但馬情報特急」の二〇二二年一月十日の記事「大わらじと大ぞうりの奉納」を参照。

<http://www.tajima.or.jp/modules/furusato/details.php?bid=3181>

(注9) <http://nobish.html.xdomain.jp/1083enoki.html>

「Potering/MusashinoTama Bike」二〇〇七年五月五日の「里塚の榎」の記事。

3http://www.ikonosato.com/culture/40.html「伊古の里」のうち「フセギの大わらじ」の記事。

(注4) 白石実三「武蔵野から大東京へ」(中央公論社一九三三年)「千駄ヶ谷のエロ榎」

岡崎清記「今昔東京の坂」(ジェイティビィパブリッシング一九八一年)に記す。

(注5) 『鳥山石燕 画図百鬼夜行』(国書刊行会一九九二年)七八頁の稲田篤信解説。

『妖怪図巻』(国書刊行会二〇〇〇年)一四三頁、『百鬼解説』(講談社文庫平成一八年)二二一〜三〇頁の多田克己説。

(注6) この俗信は近世に刊行された諸書に記される。たとえば『出来齋京土産』三「三申の条」に「又庚申待といふは其夜子をはらめば遊魂の卦にあたりて其子むまれて盗人になる故に寝ずして明す」といふ」とあり、『山城名所寺社物語』「青蓮院御門跡」の記事にも、ほぼ同文が載る。『出来齋』の引用部は『新修京都叢書 一』(臨泉書店一九七四年)五五八頁、『寺社物語』の引用部は同叢書

二二巻(一九七二年)五六〇頁。

さらに『風流曲三味線』巻一「長老様の髯引出物」に「今にうたへて庚申の夜まじはり其夜やどりし子は、成人して盗人になると云つたへし」とある。『八文字屋本全集』一 二九八頁(汲古書院一九九二年)。

(注7) 『百鬼解説』二二八頁。

(注8) 『妖怪図巻』一四三頁、『百鬼解説』二二七頁。

(注9) 小花波平六は庚申の夜に唱える呪言を考証している。室町時代の明応五(一四九六)年に記された『庚申因縁記』(宇佐八幡宮蔵)に「青鬼等や亥子ヤ申子ノ我床ニネタレドネゾネタルトゾネル」とあるのが早い例らしい。永正三(一五〇六)年写「庚申の本地」(天理図書館蔵)に載る呪歌冒頭は「そまきやうや」。天文九(一五四〇)年写「庚申の縁起」(慶應義塾大学図書館蔵)には、その部分が「シヤウキヤラヤ」。

小花波は挙げないが、元龜二(一五七二)年写「庚申縁起事」(富山市立図書館蔵)も同じ。天文二二(一五五三)年写「庚申大事」(小花波蔵)には「商迦羅耶(シヤウキヤラヤ)」「慶長二(一五九七)年写「庚申祭祀縁起」には「シヤウキヤラヤ」とあるよし。これが変化して、『妖怪図巻』「化物づくし」の両絵巻の祖本が描かれたころ、民間で「シヤウケラヤ」と唱えられることがあったのだろう。なお小花波論文は『庚申民間信仰の研究』(庚申懇話会編同朋舎一九七八年)所収。一一四〜一二五頁が参考になる。

(注10) <https://blogs.yahoo.co.jp/okad024632/16608743.html>「各地の庚申塔(北区-6)」

(注11) <https://ameblo.jp/hanagamankaido1/entry-12183454208.html>「板橋区の庚申塔(観明寺の都内最古の青面金剛)」

(注12) 『日本石仏図典』一〇二頁

(注13) ①板橋区・観明寺の寛文元年造立庚申塔では、青面金剛が二匹の鬼の頭をそれぞれの足で踏まえる。二鬼は正面に顔を向け、前腕を地面に着けて重みに耐える格好。左側の鬼は膝を折曲げた右足がわずかに確認できる。②台東区上野公園聖天鳥にある元禄三

年造立庚申塔の場合、頭を左方向に横向きで伏す姿勢に彫られた鬼が認められる。頭を踏まれて顔がほぼ正面を向くよう仕向けられた格好。前腕下腿を台石に付け、重みを支える体勢である。③台東区今戸・瑞泉寺の元禄一四年造立塔の鬼も似たスタイルである。④元禄二年に大塚・護国寺に立った塔の鬼は首元を踏まれて苦しげな表情になっている。右手の指先が確認できるが左手は省略される。やはり頭を左方向に横向きで伏す。下腿は台座にぴったりとつける。⑤新宿区高田馬場・観音寺の正徳四年造立塔の鬼は、頭を左方向に横向きで伏す。首元を踏まれて顔が地面にうつぶせになっているように見える。前腕下腿は台座にぴったりとつける。⑥根岸・世尊寺にある延宝二年造立塔の鬼は、頭を左方向に横向きで伏す。顔が全部見えるよう額のあたりを踏まれて、体勢が右側に崩れそうになっている格好。以上は

「TATSU\*」のブログ（東京都十川崎市の石仏）」

(<https://blogs.yahoo.co.jp/okad024632/16521129.html>) を参照のこと。

(注14) 『百鬼夜行の世界』（人間文化研究機構監修 角川学芸出版 二〇〇九年）に「百鬼夜行絵巻」真珠庵本と、同系統の国立歴史民俗博物館本とが掲載されている。一一頁、二〇頁を参る。

(注15) 小学館日本古典文学全集三六『御伽草紙』四六八頁。酒吞童子を描く絵巻物諸本にある酒吞童子斬首のシーンも当然石燕の眼に入った可能性がある。参考例として、たとえば國學院大學図書館本「酒吞童子絵巻」なら『妖怪萬画』に「妖怪たちの競演」一七二・一七三頁（青幻舎 二〇一二年）を参照。但し鬼は仰向け。またチェスター・ピーティ図書館蔵の奈良絵本「義経地獄破り」

に、義経主従に首をはねられた鬼の胴体が地面にうつぶせに倒れている画面がある。斬首された酒吞童子と似たスタイルで背中を見せた鬼の死骸が認められる。『義経地獄破り』チェスター・ピーティ・ライブラリー所蔵（小峯和明・宮腰直人解説 クレア・ポラード・潮田淑子翻訳 勉誠出版 二〇〇五年）参照。

(注16) 毛利龍一「河童をヒヤウスベと謂うこと」（郷土研究）第二卷七〇号一九一四年／「怪異の民俗学 三 河童」（河出書房新社 二〇〇〇）に収録。

(注17) 『日本隨筆大成』第二期二四卷四五三頁（吉川弘文館 一九七五年）(注18) 厩は尻と縁がある。天明五年「川柳評万句合」合印宮一枚目に「馬のはきいたがかつばのへはきかず」とあるから（新編川柳大辞典）東京堂出版 一九九五年）、『画図百鬼』刊行の十年後には江戸で「河童の尻」の慣用句が定着していたようである。その後では寛政九年成立・太田全斎の『診苑』にも、この慣用句が採られている。ただし、石燕がひょうすべ図を描いていた頃に、「河童の尻」が衆庶の口の端にのぼっていたかについては不明である。

(注19) 「茶にす」は『画図百鬼』出版の当時、既に使われていた慣用句であった。明和六年刊『根無草後編』巻一に「此大王を茶にしおるは、言語道断につくき奴と、忽水虎を蹴殺し給ふ」とあり（岩波古典文学大系五五『風来山人集』一〇八頁）、翌明和七年刊『辰巳之園』にも「あんまり、心い」と思つて、何ソのかのと、茶にしゃアがる」とある（岩波日本古典文学大系五九『黄表紙 洒落本集』三一〇頁）。『画図百鬼』が出る一年前、安永三年刊『婦美車紫鹿子』には「しつつかい身共をば今お江戸ではやるおちやとやらにしおる」と見え（中央公論社『洒落本大成』六卷 一五九頁）、それ以降では、

たとえば安永五年序『当世左様候』に「錦考ももちつと狂言を茶にしねいけりやアいゝねエ」(『洒落本大成』七一七頁)。安永六年刊『娼妃地理記』の「月本国風土」には「これ陰国のいさをしにして、日を茶にし月を翫ぶのしるし、日本の本ン意なるべし」とある(『洒落本大成』七一三頁)。

(注20) 中央公論社『洒落本大成』六三三頁。傍線筆者による。

(注21) 岩波古典文学大系五五『風来山人集』一三五頁。

(注22) 『洒落本大成』六一二―一三頁。

(注23) 『洒落本大成』三四九頁。

(注24) 岩波古典文学大系五六『上田秋成集』三四四―三四五頁

(注25) 岩波古典文学大系五六『上田秋成集』二六五―二六六頁、二八六―二八七頁。ここでは『画図百鬼』刊行前後の文学作品から茶

道批判の語をとったが、思想書の分野でも茶道に凝る町人への批判は見られた。たとえば享保四年成・西川如見による『町人糞』巻四に「兎角奇麗風流の心を用る物なれば、貴人高位の楽にして、町人百姓の翫ぶべき道にはあらず。尤詫茶湯とやらんにて、竹の筒、瓢箪のわれにてこがしを吞ても、其心閑静清浄ならば、是をまことの茶人とはいへりといふ人もあれ……町人百姓など、是等の人のまねびをせんも、又似あはしからず……茶而已ことくしき風儀を好む事心得がたし」とある。(『岩波文庫』『町人糞・百姓糞・長崎夜話草』八〇―八一頁)

(注26) 大和国城上郡(現在桜井市)に鎮座する穴師坐兵主神社・穴師大兵主神社については、全一六冊と膨大にわたる植村禹玄編『大和名勝志』ですら、延喜式神名帳からの引用のみで、ごく簡単な記述に終わる(奈良県立図書館まほろばライブラリーのデジタ

ル画像版では第一三冊の第七九画面に見える)。安永年間に執筆されたといわれる本書で、かくのごとくであるから、石燕がこの神社について存知していたとは思えない。

近江野洲郡の兵主大神社(現在兵主大社)については、『江源武鑑』巻九永祿元年一月二日の記事に、帝の病氣平癒を祈る三〇日間護摩供を將軍家より命じられたことが書かれている。また巻十一永祿八年三月小一五日の記事に、將軍家南殿に鹿が二頭侵入したので、厄払いのため、七坐すつの護摩供を命じられた近江諸社の中に「兵須社」もある。しかし大部な軍記の中で、石燕や周辺の人々が、これらの記事に逢着し、兵主社の存在を意識するようになったとは思えない。

享保一九年の自序がある『近江輿地志略』巻六九野洲郡に、「兵主大神社」の項目が立てられ、由緒が述べられる。それによれば、源頼朝が平家に追われて都を落ちるとき、この不埒池で兵主神に願かけしたという。頼朝は、兵主神が一日三度池に影向するのを聞き、今がその時に当たると思っ、立ち止まったということである。多くの武具を奉納して武運を祈る神とあるから、石燕や周辺の人々が、このエピソードを読んで、では、石燕や兵主神とを結び発想は生じないのではないか。

(注27) 国書刊行会『妖怪図巻』一五三頁多田解説、村上健司編『日本妖怪大事典』(角川書店二〇〇五年)三五七頁

(注28) 原典のサンスタリット文字はアルファベットに置き換えた。傍線筆者。

(注29) 国書刊行会『妖怪図巻』四〇・四二頁